



新編
野放句集
夏

5
4723
2



門 5
號 4723
卷 2

顔題發句集夏部

四月

更衣

春之装とよまひくふ衣之
塩釜の表は花日くあるも之
名同哉とあはれも何れ文衣
あひも娘持とやうも之
更衣そより常哉解より
あふも久真哉衣持とけり
衣のへちし似妹のをとと料

蝶夢編

私費
嵐雪
露沾
支考
嵐葉
調表
月下

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

孫ぬま

給

衣之入涼し支物多きと念ま
一松子ぬま、歌ありまも之
是づく、遠子立ちたり更衣
起くの外あきむし衣之
るぬまや表の字のあらむ
孫ぬまやは別て夜宿の思
てし、此昼一志あり給ぬ
給ぬまといさそり、まあら
一、流り給よた歌わす未
人先は留まの給や衣之

佐後 雲給
江川 百里
宗瑞
唐元
木因
千代
涼菖
其角
許六
夏一

書後

礼祭

奏祭

給ぬま花ま入芥子の一重給
飲食のきほひはまらう給ぬ
己位六位色志まほまを給
を始り焼けや初人者すれ
其の道にのりあひ、青簾
ふり、まは物立ぬまを
君う代やほく、祭も給ぬ
あひま加れ、やて、水牛角
酔歌り、あひま、白ひが
舞、お、お、お、お、お、お、お、お

来山
吾仲
丸吉
大和 梨葉
逢松
悉士
哉人
言水
去来
乙由

日吉系
千園子
灌佛

日吉系 泉徳やせらる太子記
その外は櫻の實あり子園子
灌佛や授子さ乳も古の兒
灌佛や日吉系より寺あり
灌佛や日吉系より寺あり
灌佛や我死をたぐ子取婆
灌佛や乳もあはれも此丘尼寺

湖春
文素
其角
支考
曲翠
荷子
毛統
助四
乙由

夏二

花市堂
竿の躰弱
夏巻
夏花
夏書
夏別

灌佛や乞食子越る毛吉の門
何事人物先か免き世川仏生云
花市も小僧人免彈の内通あり
かくれ家よりくもぬ竿のついで
おもたへし百日おのち敷日と
花へも故茂ありき夏百日
花つとやひも系投て、種のお
夏も摘く片枝葉の乳も揉乳
六のつとより一葉ち敷き夏書
その中に夏系へ入る夏別也

治天
馬海
乙由
筆波
支考
千那
如行
山川
案里
梅此

煮酒
新茶

古茶

風炉

麦秋

酒煮のや秋衣を為るのうら川
昇身と暮るまぬ次への新茶が
祖又祖母のあつても世中て新茶が
れぬいへ古茶かき出れや壺の石
その道を行なれきり風炉の灰
疵痕もる兒もあつたり麦秋
若くもろれ秋衣を麦の秋
麦衣をわきまへく思ふ境の先
婦掃の支度とほくや麦秋
麦秋の肉も茶衣を食ふさう

久風
支考
文下
田札
岩舟
浪化
許六
非冠
木尊
里姜

夏三

卯の忌腐
青嵐

短夜

麦秋や立向も寝るたてふ
麦秋やけりくもれもれきり
麦もちやりの秋衣ゆき等の靴
立向の解くくの忌く
長向の雲ゆき出せきり
青嵐さきつゆけや苗衣を
雨あらし松の白ひや青嵐
卯の忌に危あつたり
茶衣の衣いへりり
麦の秋や茶衣は二月の死

茶衣
茶人
沂風
蝶麦
百川
煮考
嵐雪
支浪
支志
三
麦二
茶衣

夜のついでに
 夜やまの人の影のたゞし
 菱の糸や崩れまゝの冷た物
 友に夜冬山名れ首のたゞし
 一々夜や坊さしゆく氷花
 短夜やたゞと桑の枝長を
 ぬやんまの首のついでに
 短夜や夏の虫もほくろに
 不々夜や止んては枝の青
 短夜や階子の眠る花も

示 畫花
示 北枝
示 色蕉
示 言水
示 氷花
示 方山
加 菅本
示 五美
示 既白
示 狸風

夏四

芋植
 物のり
 青さ
 花の花
 牡丹

芋植る月卯のまの月又
 口のも磯の白ひや坊のり
 書けりやまのりちの種も
 石のまをにまのり花の花
 為井つたけまのり花の花
 一かゝる花のまのり花
 廣庭にまのり花の牡丹
 花のまのり花の牡丹
 花のまのり花の牡丹
 花のまのり花の牡丹

示 星露
示 利牛
示 色蕉
示 椀際
示 希因
示 那業
示 智月
示 秋風
示 李由
示 徐寅

牡丹

芍薬

けありの是はと抄ふほらん乳
まらり子乳の益無へと牡丹少
兼お好孫もあまの娘をんが
月蝕の露よわくまの白牡丹
誤入六崩までて凡を歌牡丹が
不入た小まきく又あつほらんが
まきく小侍の掬くはらんが
芍薬やほらんの下にまらんが
芍薬や錦と牡丹の川まらんが
芍薬より女日の歌あらんまらん

専吟 支考 風弦 木導 雲裡 湖内 建河 料蛙 鼓鼓 巴静

夏又

花葵

杜若

あつそく候てとらりああひは
せりよて蒼城あはれ花葵が
花葵一のうそや笑うりりり
たんくは異日殺や志河が
雨の白やの掬てけかあひは
足跡の跡よあややあひは
あつそく候てとらりああひは
あつそく候てとらりああひは
杜若より水あああああ
あつそく候てとらりああひは

花葵 若者 可風 信徳 沾位 春来 芭蕉 冬角 菅氏

傘にすたぬ雨さうかたの月をこ
 葉のまきと立葉も乃くは杜若
 けんをと指くおろそつらつら
 どのくく水滸りく杜若
 す物と花のふくむかまつら
 運まぬは是非もおやうつら
 湯のぬくあつたも加多川と
 雲の雨もゆらてやうふの月をこ
 青空もよも城のあまねつら
 聖徳くや風もさうあまき草葉

本道子
 白雲
 伊勢 賀枝
 宇多 林
 治を
 伊勢 竹佐
 文素
 和吟
 之伸
 夏六

玉巻芭蕉
 玉巻葛

一八
 一八や魚より姉も虫ひつら雨
 一八やまゆも九草の花の教
 八八くくくくくくくくくく
 袖ひく子あはの泣や花ひくく
 針ありくと蝶よきんふ蕎麥
 さらふのあくる炭中室う乳
 神もはく比丘尼のうくや花ひく
 つく海女の妻よあ葉くあ子のふ
 者よあふ二本はりりけり花
 吹ねる風り川あ子のふをせ八

伊勢 孝賢
 源菴
 長紅
 伊勢 乙明
 乙由
 何在
 乙筑
 支考
 智月
 酒堂

嬰岳粟

押合ぬ笑はちりきり女子の足
 青くきれた白き地のけりれ花
 雷のひききたちりけりれの
 ちりきり女子の一字が
 けりきりけりけりけりけり
 花の白れもくきり女子の
 きりきりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり

舎瓦 嵐葉 蕉葉 落枯 近に 神徑 木名 卓袋 林石 陰夜 意程

夏七

風車 牡丹をりを負ふ軒一女子の足
 余のふりりいふふの足や風車
 蝶も夏草とふりけり風車
 岩友や浪とらけり及山
 舟の道敷へきり踊り花
 公たきりてけりけり一葉枕中
 くの足やけりけり及二一
 卯の花やけりけり所のかき指
 卯花むや里乃るけりけり
 くの足月夜とらけりけり

有琴 希因 巴文 一番 乙由 光勇 芭蕉 左角 赤治 瓶外

千の葉の麦草よちる地ねが
 卯の花の強万くくん里の川
 外向うに渡かこくわお木垣
 くのまればちうらひ人の夜は
 卯のまやつがと無あう枝のあり
 ちうたうにわかき所へゆく首乃志
 己ら楓葉をよちるも一さう梨
 子規ゆめは歌りや可う楓
 思まのよおひの向や若楓
 かひひら秋ありや成あこみく

昌房 本末 伊賀 万平 風麦 蝶麦 曲翠 支考 涼苑 嵐堂

若葉
 余の葉をよちるも一さう梨
 大定も乃くは若葉の葉は
 和葉あけきりくくく
 ちう水またちう若葉也極の先
 一さう、秋の園はあう若葉が
 おれとあまひもさう若葉が
 ちう海へく候のけうちう若葉が
 皮皮も同の舞ふ谷も若葉が
 枝のまは投うくくく若葉が
 山越若葉の歌さく若葉が

可風 北枝 惟花 外高 治荷 山崎 呂丸 寺吟 清水 蓮之

若葉の心

葉桜

桜の實

夏木立

はらりと八幡の末てなる若葉の
心にあかきなるよ花の若葉の
まは花の西のありてはるる
葉桜や寺中の入のありて
さかきもや鳴くも山はか
葉桜や花のありてはるる
花とて風をなりて桜の實
実桜をてはるの冷ひはる
夏木立中に葉の末はるる
夏木立はるるからぬ夏木立

松雀
高岡
淇水
希岡
琴吹
蜂鼓
若足
一途
葉花
地歌
夏九

木下園

木下園

秋の葉は異なりこの夏木立
夏木立はるる木つてはるる
夏木立はるる日乾や夏木立
寺の傍もまはるる夏木立
下園や梢のありてはるる
下園や梢のありてはるる
山多もまはるる園に木立は
牛の目も光る山路や木下園
傘もあかりもあかりはるる
夕さへや花もはるる川の流

高岡
安枝
希岡
常岡
花電
除瓦
子春
白瓦
古芳
文章

相の花
 夏山
 夏野
 楯の葉のあつても葉の薄くは
 茂る木やあつても葉の薄くは
 光りあふあふ山の山をきり
 夏草や橋をたたく川通る
 吹礼の持さうり川夏野
 殊有ふ人哉枝打の交野
 啼きあれ虫のあふ夏野
 遠の路志川うきな山の
 雲の中をたたくそのまゝ夏山
 夏野うきあつても相の花

如行
 猿維
 去来
 其角
 市形
 色蕉
 一笑
 野水
 怒風
 其角

夏十

花柚
 美人草
 青山椒
 子鞠
 担穀
 白丁花

相の花持せあつても長冬
 杜松針の産もふれ白ひ
 二盃目あつても花の白ひ
 白ひあつてもあつても美人草
 裏つり垣乃及りり美人草
 白ひあつても青山椒や美人草
 子鞠花も枝も動や皆の青
 小子鞠や垣のあつてもあつても
 垣乃見のふり鼻つり担穀
 さあふのあつても四角はくも花

巴辭
 車馬
 岩解
 季吟
 其瀾
 乙由
 壹中
 曾北
 一玲

舊瓜
藪棧

何の葉茂借くから免んまてぬ

乙由

芭蕉

桜桐の花

藪つゝは心の春の如く葉が
何乃早下りしをさきけり藪椿
己ら葉は掃きくちりて桜桐の花
蛇の葉は香及寺とてあつるのふ

其後

里朝

竹の子

竹の子や父の齒くまのつら
たきのことや種ましの縁をさ
竹の子や父の齒くまのつら
たきのことや種ましの縁をさ

嵐雪

芭蕉

大芳

木導

夏十一

竹の子

竹の子や熱風度いそぐ
筆や何おもくぬきく輝き
たけの子や伸らうてハ款をさ
竹の子や熱風度いそぐ

藤守

与考

桐夕

本系

末山

以之

千梅

傍亮

芭蕉

支考

篠の子

さくの子や独りじと根も起す

水繁木葉

傍流や流すちりて芭蕉松葉

竹の子やゆめ多うて遊瓜つま

筆やまもあつれまたのそと

岩梨

落

葵

蓮の浮葉

郭云

於の落葉さるる起尚う乳
岩がや山の道子志んんさ
朝もた岩梨お猿も足
夜もさかろ落の葉度し西の音
葵の葉不使りやまゝつるせりり
蓮の葉のさぬの中にも浮葉さ
蓮の乃の葉さ志んんん起り乳
常の葉子あつてけけけおん
そんんんんんんんん郭云
有明の池そのまふおんんん

後川
山
任口
千那
智北
荻山
明水
荷子
守武
望一
宗因

夏十二

海のうたのうたもさるるのうた
深き水に啼く鳥の音
郭云大休系哉り朝月夜
朝もさるるお猿も水の上
木から風葉つるもさる子規
村の音もさるる愛入きり
おんんんんんんんん起り
おんんんん何れ木陰り郭云
深き水に啼く鳥の音
川燈火月の夜もさるる

芭蕉
来山
常良
夫系
嵐雪

杜鵑をくわ電符とすの
中々東風なふあけき三声
内寄きあにかあつて強き風
その癖よりあふり女子祝
提燈の光よ詮かしおとす
郭公泣のま川によるゆき
杜鵑もくわ日侍者老所
ふふふあは秋葉より流るる
都山石不月由のあまを時鳥
川夢も一羽くわのわと起す

大小木
尚公
我思
松風
雲石
木固
老丸
文休
脚受

鏡亦や喧嘩は清く郭公
おと起す一針まゝ立にいら
深きあは雲踏ま川に
子祝あふりやちと鏡山
似ておれおれくわや子祝
子も踏ん枕もゆきんおれ
啼にまふ笑ひいふ郭公
中々あふりのかうおれを
幸か不幸か一そとら子祝
郭公泣のま川にゆき子

立志
芽樹
高川
支考
旬堂
其角
すて
浪化
朱松
神坡

此詩のひたの中や子規
あつた女あり音の村を
おとよびて其の世をわが世の改
むの男は軍をえりて其の
三和同をえりて其の
蜀をたつたや木の乃れ角楯
はひたつた月夜馬の流や先
一和て安城とすふは郭云
使まきくハ二階の森さう時を
深とよびて其の山のはひより

羽衣 舎飛 開七 智月 歌石 史邦 望東 五子 松原 時彦

夏十四

夢遊

抑々おの夜ゆくのまにまに
深き水一杯く若月の欠
ぬる歌心は起る海はあふ
我々の川筋をわがやう村を
子規 夜多木城伐る言ふ外
あやむら夢を遠へる蔵りう乳
夢や言哉へくたふ事いふ
くくひさや年數り志を啼
夢や笠如まかひく西月さ
おの夢のあふまきのつたが

乙由 彦元 秀吉 古山 古芳 松葉 芭蕉 支考 玄武

老翁

新撰

凍散名

雪や電りりり此等の雪と啼
ふれ我を淋しきと加へたる
やうくしと出く啼とね布穀
しる敷支おやくあやうん多
啼はまひ啼ぬ淋凍散名
鉄砲の藝吉の泣やかへたる
植桂し山田冬青しかきなる
かへたる我とまひし心免てし
たゆみく人あゆみりり凍散名
留まじりて替ひ志もえん入に鳥

此行 色蕉 文州 猿維 頼思 氷花 舟井 乙由 赤若 都覚

あまきききりり此等の雪と啼
ふれ我を淋しきと加へたる
やうくしと出く啼とね布穀
しる敷支おやくあやうん多
啼はまひ啼ぬ淋凍散名
鉄砲の藝吉の泣やかへたる
植桂し山田冬青しかきなる
かへたる我とまひし心免てし
たゆみく人あゆみりり凍散名
留まじりて替ひ志もえん入に鳥

希因 麻父 何聲 鳥所 乙筑 玄武 雨林 蝶爰 冥更 卷阿

方目
旅系雀

編蝠

舊樹入
青鸞

啼立し鶯老羽事や夜の舟
旅の極乃ちうもてせにひこ
ひこ子啼や贈の言も終
おひあふかしく旅よひこ
いさうひ多川向ひけりひこ
い切や夜受てはる唇の巻
冊書や神山の爰れ第一
書鸞や代うく約よかいひ
青さねや世乃ちうもて子苗
編蝠は顔うれかき橋を度と

陸三
九次
高川
寺子
北而
鳥朝
巴静
准雅
正秀
柳蔭
夏十六

乞養

蟬初吟

蛩取

蛩出

蟬福より子りやうとくはし健
かゝりや遠く社城ふと
蟬福や花り花もぬ瓜も
のへうや故きう故あま立水
乞養もも我よのりて我ま
麦芒葉の家とてやうん土鴨
初蟬や背井をかんもて心か
き川蟬や梅雨の晴り影あ
蛩ひうやまもとる氣の流り入
蛩出もも通りの流し去る中

北枝
星推
叶月
洪九
其角
智月
杜若
孟遠
浮流
南畝

協の子

燿取協

子子

亮蟻

蟻

協の子や第の虫よは此蟻の
協の子や糸引習ふ蟻虫松
子起や燿取協の月夜か
ほりや水の月夜につくさ
ほりや起しは蟻水か
枯をくし指すかへも蟻蟻
やうくは虫を引く蟻蟻
這おとこひや下の蟻か
昔の事たまひく蟻蟻
蟻のくまふか蟻かひまへ

妻波 朝休 史井 気電 燿取 芋魁 素法 芭蕉 曲翠 芦本

夏十七

蚊

蚊帳

月代をきく交立り蚊の蚊
蚊のひも本知の音の響り
蚊の起るや行ゆるまは蟻の
山道の蚊冬昼中に喰ひ
家産ハ蚊の起るまは蟻
血蚊のけしやまは蚊の起る
おのくし事のとらまは蟻
蚊の起るや蚊の起るにから
蚊の起るや蚊の起るにから
やうくは涼か蚊の蚊帳か

台藤 標雅 雷吉 去来 芭蕉 文章 水 可竜 不玉

生櫻

約そ光く桜巻の白ひわ二三日
網下へふ重の勢ひや桜巻
約初く桜巻せりる五月夜は
遠慮我生くかうん初ふ川下
小舟にふゆれぬりのを櫻しり
大勢の本へ一本か川下くれ
川色乾花我遊きれ初ふ川下
比哉うけおとひせけく櫻巻
飯すくや等の廣葉の初うへり
ゆりりゆきふすしひ一夜飯

浪化 晋册 言水 色蕉 風吟 嵐雪 沈足 伊勢 木岡 伊勢 永次 夏十八

額

麻の袋角

凄うぬ石の枕や一夜去り
あぢぬ勢ひの麻の袋角
神けくおきく一葉表巻つ
牛の子まろく入麻のぬくろ角

宗陽 伊勢 近之

高蒲

五月

高き尾の長巻くよ高蒲が
高き袖とあや先の白ひり
巻根とまきと並ひて高き高蒲が
内裏へまき高き入り高き高蒲が

嵐雪 秋巻 伊勢 撫定

蓬少く
高蒲酒

洞窟戸極み色もたぬあめり
川筋の葛葉吹きり流の所
我若やはか殺とくぬあや先
あや先少く殺ねり日如の月利り
葵葉の葛葉蒲やおの、朝の毒
切りり流の水よりあや先り
泥足の系くかきくや葛葉葵
何やの少く朝や朝葉葉の危
著て於蓬生の若と来にりり

笠下
曲翠
涼菟
小春
介我
乙由
後後
後後
後後
暝山

高蒲酒

殊物とほよ切りり高蒲酒
朝湯うり候味りり高蒲酒
さくゆ湯よ金と飲のひ双玉のひ
一刀尺ちん高蒲酒九節
君う代のたぐりに高蒲酒
菜玉や焼の花名ゆく近
く菜玉や髪葉の葵、菜の危
去先無難治、老子く平地打
文も物にとも切、粽已把
限少味の産葉りりり解粽

之角
言水
菖菟
見推
言水
班象
把色
嵐雪
光壽

懺

彈丸まの女子の習ふ稔く此
百かゝる稔の中にも嘆かしく
此の日の仕中にぞくく稔の部
踏ひきして女子は扱ちて其れ
見下せし書葉よあつめ懺れ
雲風と吹くも此世のあつめ
なく此の末葉はくく懺懺
太平の書あり風のあつめ
懺見ればあつめ本通まで
あつめはくく地を治くらん

越葉 此の
叱棄 此後
此抱 此馬
支考 支考
支考 支考
支考 支考
支考 支考
支考 支考
支考 支考

割裂の境

定夜の被風より並あや後の利り
きふの境は細工あつめす此世は
あつめにも後あつめをぬ甲うれ
而もやあつめぬあつめも忘れ
競るあつめりあつめあつめあつめ
毛の危やあつめの競りあつめ
七夜の外交あつめりあつめあつめ
あつめあつめあつめあつめあつめ
あつめあつめあつめあつめあつめ
あつめあつめあつめあつめあつめ
あつめあつめあつめあつめあつめ

華遠 依此
披長 依此
半鳳 依此
朱迪 依此
氷花 依此
許六 依此
嵐吉 依此
芭蕉 依此
以之 依此

茶子摘
加茂競馬

競馬豆樹

休酔日

休酔日

又月雨

又月雨也哉、中の花さく
さく、れや蚕の、ぬ葉を
はく、れや色紙、けし、壁の
五、月や、紙の、守を、あ、り、
日と、み、し、た、く、異、一、又、月、雨
又月雨也何哉、多き、く、是、院、の、入
湖、也、也、ま、出、り、あ、り、五、月、雨
多、く、に、三、月、指、を、又、月、雨
又月雨也、傘に、計、を、小、人、取
は、あ、る、小、粒、の、り、ぬ、あ、り、雨

信位 芭蕉 常牧 敦石 其角 尚白

夏北一

又月雨

又月雨に、あ、る、ぬ、相、多、哉、の、れ
は、ま、り、り、後、も、ま、く、れ、り、
五、月、雨、や、植、田、の、中、よ、か、つ、り
た、れ、あ、る、く、種、の、り、を、又、月、雨
さ、く、れ、や、を、持、り、る、り、晴、れ、
又、月、雨、也、傘、に、計、を、小、人、取
は、あ、る、小、粒、の、り、ぬ、あ、り、雨
中、も、り、り、さ、く、れ、り、あ、り、
は、ま、り、り、り、り、り、り、り、り、
さ、み、り、り、り、り、り、り、り、り、
ひ、ぬ、麦、の、味、も、り、り、り、り、

山本 孝佐 如行 流是 渭橋 支考 龜洞 菅本 後古 松崎 木高

梅雨
梅雨

己の雨や後へうけり木橋
 度うへも八咫く其白く五月
 五月雨や山を染む夜は
 夜への雨のやうくやうく己の雨
 夕立のかうくく雨梅雨
 雲の雨あつても飽か
 水はつやまなくもかた梅雨の
 雲の紫にさめる故やつら
 川登りし狐火の月をけり晴
 梅雨の後牛の里に地へ乳

志毫
 春丸
 老士
 梅珠
 大
 不
 不玉
 酒堂
 史邦
 延年
 夏廿二

己月周

たのしく春に不結く己月
 志毫の麻衣を色や己月
 細くもやうく己月
 梅の落る言れさうく己月
 ひあうらわたり己月
 さひはわ虎の洞の雨く己月
 隙との中にくる己月
 つりあつた己月
 夏の月影はく己月
 中中木物の白く己月

梅志
 春丸
 史邦
 延年
 志毫
 春丸
 老士
 梅珠
 大
 不
 不玉
 酒堂
 史邦
 延年
 夏廿二

虎洞雨

夏の月

花のつゝ
志蘇州
藻の花

破鏡のひびきたる異一夜の月
子ノ戸也暑き月取久也
夜中か秋のそとく夏あそ
川向ひて又く居る如冷夜の日
ゆまやま城きつちひら花つゝ
志蘇州改ち秋きれ水赤
藻の花よやりにすし物ゆの系
すゝくけく藻の系祝くはれ
藻の系城み川り雲の髪り形
もの花やかひくさな龜の甲

北枝
我峯
巴静
櫻良
等形
那牛
北枝
元兆
胡及
風後

藻川舟
藻の花

中に子も鹽まひせく藻川舟
そとより月城くさあ藻川舟
一あど比良のうつらわもからぬ
くれ子も侍の刃る物く外
藻川舟いさうあもくの者も嘆
くさ藻のあもさういと外く嘆
中れ草やさうねハ又嘆がら
なや念ひくさあり高き形
くれ草の城のちのれ替へる
なやうつれあ又月表上

後春
鼓索
氷花
嵐雪
乙由
若指
千代
雨夏
糸代
山季

土草草
百合

うたまわ吹舟うねる所り候
清つきの言まひくや時斗草
百合の言たの何もつ何
お中火や焼きぬ百合の言
唯ゆるやとら下敷結の系
窮る者換り取くや百合の花
多むらや百合を中く花の款
と又小く架うら外もや百合の言
紫陽花や教心小庭のふたを
紫陽花や沙黄ま志うま誠化

紫陽花

統後 沈牛
對馬 花曉
支房
素毛
西牙
半残
紫肉
芭蕉
巴祿

おの花

あまきわの儘まぬえま咲直し
紫陽花此下りあや花言川
紫陽花や教心り言何
肩掃杖西敷りくおの花
とや言ふやうれ言やおの花
勝のまこけりもお花む
りまら清く礼物れん言に言
くは言の言こからや言
言言の花や言言を取
言言言言言言言言の言

言言

下地の花

芭丈
言九
冥一
芭蕉
涼菴
其若
他若不知
来山
涼菴
青荷

石菖蒲
花菖蒲
金銀花
空豆の意
葉の實
雙葉

石菖蒲や若くは川の淀の池の中
紫菀薔薇の中は清き水も花も
思ふのよき哉 乃もやと金銀花
空豆の意 嘆きりり 麦の穂
葉の實より行つては 娘の乳
雙葉や 雛の鳥の仔 甚だおどろ
さしきや 牡丹の傍の葉のよき

猿轡
既白
八采
乙由
孤至
一風
希同
伯葉
嵐哉

夏北五

朝露草
夜露子
故依約子
酢漿
早松草
藜

夏葉やまゝとつるは つかれぬ
老僧の夢にききし 秋の草
いさよ 取手よ 故の鳥や 草の上
とかりに 夜露子 嘆きりり 草の
蛇草 泡 悲し 故夜露子が
形者も 好味つる 草の茂り
花の陰かきとて 思ひ 乙由
うさばも 思ひ 草の隅
子松草 二月の瓜も 物あり
我も 藜と 杖より 葉にき

乙由
杜若
史邦
木卯
老山
荷弓
秋萩
秋庵
将花

蔓
茄子

ひき瓜

瓶より其の子越えしはへり
くしきや免軒かゝるは茄子
粒重なるりけり茄子
筆の目越ぬけりも茄子
こゝろも多しりも茄子
紫のけり筆もも茄子
初あきしその多しりも茄子
苗貴に驚ききりも茄子
さへ不たのり愛や初あきし
あきりやかゝるは茄子

若扇
深堯
壽有
南
石
唯葉
草吹
梅
西人
乙河
元保
仲母
我思

于瓜
如瓜
南天の花
栗林系

杜鵑花

越瓜の土れぬは紫陰うれ
于瓜わらわけてるは蟹小舟
是子あき喰ふ物も如瓜
南天やさの花ちるも水泳
ぬけりの頼ひも栗の花
晴けりもその多しりも
山路も多しりも栗の花
花をかくるも栗の花
花をかくるも栗の花
さへもはなては山つり

伊珊
冬角
七里
巴靜
正秀
胡冬
風傳
半捨
春波
柳葉

合款花

去の女妻城咲く如く神の心
や、夜冬木にも入く神の心
合款さく馬の心く長躍子

茂中
強河
馬老
三四

未楊柳

せ胡松

花栢榴

第木

さへ山やへさすを先ぬせさる
己う雨あふれや流木花さく
第木や女双帯の秋や名色
さく如く詠さるもよきにり

北観
形坡
尾法
藤文

栢の花

花栢

たきそれや定家机のありは

秋風

夏北七

栢

山梔子

青梅

梅漢
春起文

栢やは建てるに社家の名に以
たき花や志の神あり白ひ雪
やんまると何あやまの志を
ほく栢の逆ひ山を如く心あり
はれりの志ありくと咲にり
青梅や染るる身れ身やまめ
青妻女や山や女子の塗木履
春起文や杖や枝城情あり
交り枝城情のほろ小梅も
春起文や杖やまの日の面

子冊
禹洗
芭蕉
志雪
浮石
万子
木尊
采仲
秋色
望翠

杏
枇杷
若併

越川うゝ山紫も流らぬ帯枇杷
若併の竹をらおて根素一
如併や若者若の勢あく死
若竹やきあうの出敷原素の意
地破るその若併をかみ根が
一枝あまきけ枝交竹のあまが
弓竹りあれ踏まら枝あ
如併や言の事とまきあむ
死しとにあま吹出たあむ

瓜流
凍老
支考
曲翠
志事
仙化
雲鈴
乙由
千代

夏北八

併の皮散
回植

死もあひあうそら母の皮
渺くしと庭とあう回植
糸之の道若て出らう回
回植乎まて形散のこも
櫻のこも念佛中屯田植
秋あうにせらうら回植
一帯にあまかき如回植
若月の後を抱へくたう
乃くし散れ合せて回
子乙女やとあれぬあむ

萩人
自悦
支考
聖行
吏明
文系
玄梅
許六
乙由
来山

子乙女

早苗

子こ女や子の泣方へ抱きり
早こ女もむきんやん笠の取
汁端は笠の帯や子苗取
子こ女や怒りやうま掛ひかり
雨おしく昔も雨は子苗ど
子苗ん今もたかをとり
ふゆれおきりにあそび早苗は
苗の色多子編と晚編と一いり
田仕中の神も清き子苗は
一番と二番も草の青田うた

笠者
圍指
其角
涼菘
芭蕉
木岡
浪化
落梧
李由
曾北

青田

田子取

涼きのはれりー田の青き
雲は杖中に青田のそとれが
草取のうま息つく青田は
晴豆もともいづるふ青田は
日の入る夕影我く青田は
わけ遠を春中に異く田子取
雷れつうをいりーや田子取
草取のうまうまや田の青き
狂の尻かぶる異く田子取
笠の想のやかくいり二番草

涼菘
文章
笠道
昔舟
治乞
其角
極妖
字白
可風
蝶愛

豆柏 粟餅 螢

豆柏くしつてかん井の市
粟餅も鶉も乃ぬるるれ
螢見や形破く光未乳
豆乃れくそ命あま螢う那
途ひ子の泣くつうを螢は
つゝ野もい表は遠くを螢うれ
曉冬を思は帰るほろろ形
夜の更うほと大き形螢うか
田の水たえせく螢のほろろ
ふれひと遠くを乃ぬるる

五月 高月
冬元 花雀
流水
涼堯
尚心
牧村
北枝
万平

長三十一

挑灯の消くさしれ螢うれ
あふも木も螢うきと水の音
奪あふく踏あやうを螢う
すとりあは澄涼く螢う
水子の音らと乃ぬるる螢
刈草れをを光る螢うれ
螢火の煙りそら螢う
螢火やまにけき清夜の方
ほろろひやまを螢う
夜うぬるる螢う

正秀
己而
牧童
探志
一發
許六
怒風
若者
阿者

敬を天

手よき心よきのあしあわら
雲のふかきわらわらるる雲の
消て又何よりある雲の
故やう火のきこひの強後
魚の青火のきこひの故を
一より多標のきこひの故を
行隅へやうとるる故を
姑のあふたきこひの故を
のやう火のきこひの故を
りてはよき病への故を

信法 富苗
未 可磨
雲 信
仁 百里
仁 風洗
我中 方堅
其 蓮之
其 一葦
兆而

夏正一

敬相

我友やあま敬やりのひを
敬相をきこひの割る夕の
かきこひの愛のきこひの
故相やほつれくさるる月
故もらのきこひの三日の
のほのきこひのきこひの
去るるとはよき朝のきこひ
かきこひのきこひのきこひ
強きこひのきこひのきこひ
地牛をきこひのきこひの

其 耳考
常矩
其角
由之
其 敬
一朝
涼菟
其角
如行
冰花

敬平

純 徑

七ふひ八起のあやかろり
露の象れまをんせりり純牛
昔れまは道教へりりあろり
りこせれおかろりかろり
牛稼り一布たろり純牛
あろり角ろりかろり象
見まろり角と出りり純牛
ころろろろろろろろろろ
何事れれれれれれれれれ
手取の徑乃血ろり純牛

智北
秋至
木兒
上世
志痛
止強
乙峯
去發
元北
妻渡
為有

夏世一

端柳生
蛇衣ぬ

致喪

水名象

端柳の子ふみもてらん風車
谷陰や一ふをろり純のきぬ
長しや約ろり子まろり純乃衣
直もかろりや着ろり虫の夜も直
着ろりや水よろりあかろり風情あり
鳩の象や象もかりの象休め
波まろり象ろりてや象これ
象の脊よたろりふ鳩の象象
象れ象ろりりも象ろり水の名
かろり象の象ろりろりかろり

枕山
那徑
曾北
上世
垂耳
荊口
雷良
肅山
し
路通

鶺鴒の巣
水鶺

取とくそつや戻まぬ鶺鴒の巣
吹舟ぬたたくて水鶺
足吉れ乃哉たたく水鶺
木つたり日さして水鶺
笑もあやういふく水鶺
雷哉そつたて水鶺
河をそつたて水鶺
九十九枝同ぬあはれ水鶺
枝折戸のかけう水鶺
打さうといぬ水鶺

松隈
水
李下
泥去
巴人
高川
吾仲
侍彦
氷麦
文素

長世

翡翠

羽枝

鶺鴒川

たかきとぬやの夜と水鶺
と鶺は水子鶺はまわ水鶺
翡翠や羽枝よそ水鶺
川せまやのささ水鶺
追とく枝よ水鶺
羽衣のま水鶺
帯しるすや水鶺
鶺の頼り水鶺
さつひも水鶺
首立ち鶺の水鶺

三河 馬
杜若
高川
義里
巴明
希周
芭蕉
荷弓
信徳
浪化

重葉お

鴉飼大や重の公と菱の虫
さの親や結冬川多きおどり
懐けさか移道か歌や朝顔
十三羽のあれ中物移道
うらみの我いひあく松子
宵然男や月見歌あつ移道
ちのとまを髪とる川くの舞
うらみや世うらみやと志
る川や葉の川村春る川流る
葉寺や流るあつ移道月信

北枝 如行 柳蔭 本寺 紫友 可吟 乙筑 以裁 柳蔭 伊賀 配刀 夏壯四

鹿子

落佛老日よけりあふ鹿子は
矢の下に母れ乳茂の野かた
つましくも居る鹿の子れ角取
嵐の子乃あや乳の歌や山留
猪り次うらま歌りさり
そ杖小平ささ歌のやり乳
雲さたや尾越の麻乃移ひら
よ歌麻や歌を火串れま歌
河編の歌のあ歌あくむ人上
在の津城志はうここ小録黄

芭蕉 立志 云芳 柳蔭 正秀 嵐雲 嵐休 班系 林凡 其角

照村

移ひ持

火串る

于編

小録

帷子

过气

夏羽織

晒布

六月

かひらの初あけぬのやあしあ
帷子や帯もさきほく吹
くまの朝ひかたへは
お格段席子ゆきや过气
かひにききかた羽織
吹度よき波つらひ羽織
の出のあけぬさき
橋入老歌の赤きおしり布

配刀 杜若 支考 伊賀 木欣 乙妙 涼菴 楚由

夏羽織

氷室

氷餅

一夜酒

祇園會

六月の蜜梅尺をきり氷室
帷子に世界へ出きり氷室
散あつと梅のあき氷室
氷室さかひに雪あつと
骨折をぬかせしと氷室
今まきの寒さかたひに
ゆけと室と梅あつと氷餅
きつと氷餅のあきあり
揮のきつと梅あり一夜酒
月餅や松系あつと入佐山

言水 柳吹 希因 文素 子礼 翠橋 伊賀 老夕 知角 治位

月は書兒の歌もなほ化新
 あげれや空の舟のつらきふ
 鷗もまて引出り函谷許
 瓜の指くつまを嘉祥
 船まふ楓の舟よ立らん
 半夏生や神菜のまはれせ
 那小舟の碇とくらくせ
 笑未れ去月のへそ人あ
 病を成昔のやうに去用
 交あた雲よ清く富士山

嘉祥
 舟の指くつまを嘉祥
 半夏生や神菜のまはれせ
 那小舟の碇とくらくせ
 笑未れ去月のへそ人あ
 病を成昔のやうに去用
 交あた雲よ清く富士山

有良
 涼菟
 許六
 方山
 許六
 恭勇
 枚風
 故足
 風水

永
 山
 近
 白
 出

後世六

富士垢難
 鞍馬休伐
 水毎月能
 御杖
 川社

富士ありやのりも雪のあられ川
 舟なりや枚の舟乃ちく
 行きりや雪れ夜ゆとのれ
 里へ冬能く出な御杖川
 冬もとや舟あられつ御杖川
 夏もつひ月ののりもや候
 春波も帯に立ちや御杖川
 川風より馬帽子かえて御杖川
 松風に魚のそらきり川社
 川や御杖の太極舟枚菟

立圃
 麻父
 一窟
 勺空
 春波
 既志
 白尾
 比若

山
 小
 一
 山

取代
 茅の痛
 驚梅遺言
 腐草化虫
 暑

取代や男女老志るしは
 子成つぬ茅の痛とらむぬ
 鳥くして日はまた驚の羽を乳
 枯子の痛くは出るは
 石も木も眼も光る阿のさ乳
 灼るくは痛き神奈の夕那
 日の園やあはれ無き牛の舌
 阿のよおやつらくと其のま所
 元山乃ちうら及ぬ阿のさ乳
 無きりやは山トら戸の置は

接叟
 日向
 雪松
 卜宅
 公果
 好春
 正秀
 尚乞
 猿稚

夏世

たゞ暑くは競ふは世の
 小女の帯にくらむる暑く乳
 肩うき子よは友あはれ暑く
 二三書驚くは阿のさ乳
 石京の踏むは先らぬ暑く乳
 相の象は埃のくは暑く乳
 二本目の扇はあはれ暑く乳
 驚中も砂りまらぬ阿のさ乳
 てり暑くは十方それの阿のさ乳
 暖暑の歌よまのり暑く乳

九草
 其角
 其乳
 魯町
 秋風
 狐登
 穴案
 風園
 毛純
 没村

寝るるる枕をうへに置るる
 何れと散れ去るる暑が
 髪留れとくふ髪を位所が
 ありま白やうめいさ通る杖
 うこくかた休れんくあふ暑が
 河の流や枕をうへに置るる
 念ふやひりくともむ名のあ
 夕立に走り下るる休れん
 白雨のあつめく月や去れ上
 念ふのあつめく月や去れ上

細石
 雲波
 後若
 免士
 玄駈
 徳友
 李由
 大車
 免費

夕立

夏此八

夕立や流ひささるる去れん
 念ふやあつめく月や去れ上
 念ふのあつめく月や去れ上
 夕立や強りか雨のあつめく
 念雨やあつめく月や去れ上
 白雨やあつめく月や去れ上
 由の立や蓮の葉たぐはの芦
 夕立の田畑りかる茶う乳
 夕立や川邊とあつめく馬
 夕立や麻の白いあつめく馬

牛角
 史邦
 松橋
 僕鳥
 許六
 菅種
 正秀
 徐寅

雲の峯

夕立や池のすくこの靴一丸
ふあや影を漏く一歩ゆい
白濁よ家坊しころを念ぶ
夕立や八ヶ岳の眼さく
ふくしの格子ぬちふ夕立が
たやちやんかしくぬ世のど
ふあや空を洗く月まはる
夕雨や大津系をけし歌書
夕雨や北林ふ歌あふら危
壁ぬりの覆るふまや雲の峯

尾 清の
紫負
巴風
去芳
千梅
珈涼
一系
康工
諸九
園指

夏飛九

照まけて夕立雲の裾をり
雨の峰あふれぬ端して
雲の峯何とぬくして消ゆ
飛社より太鼓あり雨の峰
雲のふくまにふあやの山は
都くらのかちんきり雲のね
ふあやのやちあ根を命根
鞠ゆやあふれぬらこの峰
舟入る福より笠や雲のふく
夕立や証無ひころそ乃嶺

猿誰
免頭
方山
北枝
相雨
歌書
許六
深老
寺吟
太末

去用子

一子子為死忍未や去用子
夜多我為て何んてんく去用子
體者くつんた先せん去用子
去用子一屏風八事り置所
虫はくや暮然妙くも桜花
斗りや大道せ何ま系種店
去用子や三子奈老一何り
虫子や蛙の子物か人を扇
お人虫松種アんく去用子
虫何やんくまんく一我まき

許六 其角 去来 雛餅 下枝 伴好 此老ふか 宗瑞 俣牛 風律

扇

そと風の二子我ひく扇は
日南川行歌思ま扇う那
さる人の故及対う歌扇う那
いあまま二本出りる何あ歌
歌ていひるけく乃う歌扇う
子枕のたよりつふああ歌
と扇一よ破物ものもあ己
去用子遠りたの那去用子
一ひつあふひくあさる去用子
色いままきれや何去用子

か奴人 一象 一笑 尚白 周氏 猿紺 蓮之 許六 表立 寸長 己筑

扇

行拭

日傘

掛香

簞

休婦人

解おいにしに掛る敷行ぬえ
行ぬえい小松よくけく仲はぬ
我白ひあしはらけく行拭
梅子りきあかかてて日傘
障おき春の古き如日傘
うけ香や公もあそびく遠い
言られ人たけりく此意真が
定たりに昼探の夏や簞
取らうて庭冷きとやたす野ら
空蟬の鳴るも去るや竹婦人

千那
嵐亭
出月
風和
方堅
備後
晴月
長門
卯七
素道
北前
芭蕉
先放
希因

夏四十一

抱簞

篋枕

涼

抱いてく涼くさく休婦人
抱簞や夏も涼く山中く
抱かこや思ふ公君もあまし
月影のぬく涼くや篋枕
すくさや夏もぬけや篋枕
涼くさや思ふ公君もあまし
八日敷
入敷のちくすく涼く休の中
きくさや舟も船政のちり髪
すくさや舟の尾あうて川の中
涼くはや休掛りり敷つて

其角
涼菴
去来
乙由
利合
吾来
山行
草津
北後

暑 暑 暑 暑

すしはち極うは是れあつ下
涼きも埃よほくふ休の枝
きしきわ風川船の帆あし
怪子の寄中ゆくく風きし
涼き我あつるきくら水車
すしはち極うは是れあつ下
腰かけの中涼き支障子が
涼風多目出交時を名公うれ
すしきや等にはりく約の糸
きしはち極うは是れあつ下

支考 卯七 正秀 傳門 木周 一有 洒事 幸事 燥夏 樗良

夏四十二

風薫

納涼

涼きや夏あつたせはえれ
赤板哉曇てや風のうぬき
は彼わ風のうぬれお松子
凡かぬれし下下老る豊
松陰より入るあり涼き
さしきよはし格を回しり
鵲風よ日影わさる夕涼
夕涼よくと男に生れり
秘座をわくさる夕涼
夜去るみや白の夜月あ

秋瓜 芭蕉 撒士 兼坡 来山 芭蕉 松涛 女芳 里圃

赤水

つ立ちく帆はあり神や涼を舟
帯し以て杖出せくも涼を舟
唇に墨つく欠のすく見れ
中男れ城を見てあふりなき
夕涼にゆめぬひの元野り
果てて是命もつけぬまを
日枝下りけく暮る夜や涼床
今捨て休にありあらし涼
松の葉もくも巻くふくも電
水赤や緑も花も涼るゆと

近に 文子
遊刀
千那
木導
乙由
老士
登元
柳若
手代
牛角

夏四十五

清水

赤水や故のあふり涼床の限
昔小車流れぬ通ふ清水が
きれ梅は這とよ清水あが
ま川もこの昔あらし清水
る桐枝と雲より通清水が
高念佛中も涼床清水が
引立ちくもこの昔あらし清水
雲影の白ひも清水が
松の色に雲のかさ清水が
小川もあらし清水が

巴瓦
荷兮
芭蕉
猿雛
井坂 井徑
扇扇
濂月
桐之
一道
尚白

社醫道のほり、針を敷き清水を
 連ねてせしむるは、世に清水を
 抄りて、まき入るるは、清水を
 桶あてて、置きて、留るる清水を
 証す、く、六部、まき入る清水を
 けり、井や、庭うら、まき入る清水を
 ぬき、まき入る清水を、麻地酒
 清漬の水汲よき、く、まき入る
 順孔のまき入る清水を、心太

徐眞
 文深
 芳斗
 心堅
 風朝
 桐雨
 葉府
 一招
 芭蕉
 其角

夏四十四

四針子約の濃と也とありてん
 雲の系、すく、海を、く、心太
 ぬき、まき入る清水を、まき入る
 七、く、まき入る清水を、まき入る
 玉川、まき入る清水を、まき入る
 すく、まき入る清水を、まき入る
 高水、まき入る清水を、まき入る
 切麦、まき入る清水を、まき入る
 冷麦、まき入る清水を、まき入る
 ひわ汁、まき入る清水を、まき入る

秋之坊
 園室
 貞佐
 信後
 巴辭
 宗解
 支考
 葉十

葛水 切麦 冷汁

水飯 于飯 菱切糸 香齋散 深取 子桃 揚塵 李 林擒

水飯や揚塵を乾飯のころ
于飯や花をやく乾のつま
菱切糸香齋散のつらや蓮花王
山水り流るちりきり香齋散
木のまがり光る眼やうらみ
揚塵や千種佛を名にふれ
ありの乾飯うらふ蓮花李うら
ふり取も林擒を軸て西ふり
英り乾飯り食つく林擒り

丹後 百尾 穀々 重頼 舟休 芳菊 哉宗 孫香 之角 大音

四十五

乙葵 百日如

又りも百日如者かきんれ
ちりも咲くくく百日如
百日如ふりもさるはあれは
なすくこのをかこさる英りさ
授子と川系に是のわけりさ
る井や花婿とる家の玉
梅子や咲くも咲く花のさ
は川りも蓮花りぬれぬら
噴の目眩る梅とる蓮の花

乙葵 百日如 千代 麦守 特老 参黄 許六 希因 湖春 乙妙

蓮

包すれ氷のひる蓮の乳
 佛光起く公置るる蓮の那
 蓮の志林一のうたふあふ
 志あけや後から物蓮の志
 心成流の粉氣にありぬ蓮の乳
 夢の中いささくゆれく蓮の色
 極糸の唾やうくまをれを乳
 蓮の志たぬふへ響かぬ骨
 起く入り人あ笑は蓮の花
 蓮比やけきも歌の志ひより

形坡 秋池 支考 指風 後吾 以之 杜亮 板若 可成 宿家

海浮 志於蓮や糸の者もひりけ
 深淵も田子の杖より引く
 海浮に弓矢もたてぬ水の志
 何骨やけきも歌の志ひより
 何骨の一輪つゝたすも
 羨嘆と軽喉後入る入は
 鳴の粟女抱く嘆や蓮の志
 引かすに水の志もあふ草が
 草葉やあやもれも水の味
 流ちるおぬあいの志れも乃と

如行 兼子 随友 一高 乙高 連中 尚志 正考 曾北

海浮 何骨 羨の花 草葉

海老

蘭の花

藍川

鉄線石

眼皮

釣鐘草

凌霄花

ふもきや貝取出双と巻つる

水産り死する海苔のそと巻つる

蘭の花はひらく水の溜りぬ

藍がらや藻の双さねを海苔色

平川の通るこゝあり鉄線石

山伏子隠居や垣り鉄線石

花との釣鐘草の高れま

釣鐘草は後よけする若あはし

のそんや松とてなつて巻つる

海老

蘭

藍

鉄線石

乙由

藍元

凍花

裁人

希周

夏平七

蒲の種

鱒草

鹿の尾

風葉

玉簪

雪の下

蒲の種やあきかすら影のふ

蒲草や子たの抜て地と

鱒草や中か一母立ちく

風葉をかぬかり枝白ひら

の蘭の島や玉簪のそと巻つる

風葉は下には巻れぬ白ひら

きぬもや髪水控し髪の色

撥実珠や髪後さけるむの

目さかりのふや原しまきれ下

合

可

素

希周

文雅

乙兒

臥高

三伍

香舟

登歌

登由や西のたはぬまのぬ
登歌や一夏山伏の巻つゝ
ひる保の志やなみか今時分
教子花や結のつづく砂の上
登由や牛の登集ま遠うま
登由や地すのまも方公食
ひる歌やのりまゝまゝのよ
ひる保の西つよまゝ登由結
登由や扇の塩まゝかみ
登由や舞の舞はけしるま

登由 支考 舞立 不有 也有 千代 乙筑 冬季

掃の花

神雲花

雲雀鷹

蟬

ひる保やいそゝ要さの地ま
登歌や鳴とくとまゝ通り
小舟やうゝそのまゝ舟せん
啼はるゝ鳴て流るゝ疎を雀
枝子より風吹入るゝひもりた
やとて死ぬけりたゝんを蝶色
あゝ出りまゝにまゝ好ひあ
傳うゝは木もまゝ蝉のま
春のまゝ海まゝや異ふま
空舞しあゝまゝ仕事か

登由 乙由 乙由 乙由 乙由 乙由 乙由 乙由

空蟬

北枝のふかき深き涼しや枝の蟬
蟬の鳴るも採るもあけぬ心板
蟬の鳴るも採るもあけぬ心板
はるらうつむむむむ蟬の鳴
んぬらうと一日もやもこべ急
いぬらぬあもかたし蟬の声
抱く木もさし勅る蟬乃あ
我ひよも暑くやうくせしあ
あにぬれはさふてや蟬のか
目の玉も取る出り蟬のう

北枝 家川 支考 徐風 小春 木欠 可風 文考 大芳 川高

夏虫

蠅

夏虫の大蚊取るもさるる死
すれ立の蚊もさるる如夏の虫
いあもてもさるる如夏の虫
示れ然るもいあるくく夏の虫
蠅もさるる如夏の虫
蠅の中ハ蠅もさるる如夏の虫
蓋もさるる如夏の虫
若くさや毎葉にけり牛の蠅
牛もさるる如夏の虫
頬もさるる如夏の虫

我峯 昌房 勝死 園更 牛那 等水 牧考 九考 老士 雲考

又虫

納

毛虫

金龜虫

川將

如るれりるを以て誠を雲の如
系法にありけりしものなり
いにをんぬるの如道小西條
矣し然れりちかう毛虫が
踏付く物有りしと毛虫が
子起るををををわたりて虫
川うらや葉が虫に於て有
川かやや背よりうら月味く
川物も一白帯小巻の業
川うらや伊勢武吉の赤禪

を南

廿九

廿九

廿九

廿九

廿九

廿九

廿九

廿九

廿九

廿九

精約

湯月取

仲能

夏瘦

秋近き

川かや上下の志ぬぬ禪
精約や法路我出て亦世帯
精つや不知火あけぬ使の上
禪式押も眠とそく湯月取
漢をるる若の宗也法路急
仲能さくくも能も増加減
夏瘦や尺ぬらじの巻地る
あ川や智や焼きく泳りり
煉ちるれんのをやや事
秋近き黄とまかり結の後

立和

曾北

曾北

丙浩

言水

隆巳

友静

芭蕉

芭蕉

真考

